

「XガYヲZニスル」構文と「XガYヲZニサセル」構文との異同について

— Zが形容詞の場合 —

楊 凱榮

1. はじめに

楊（1986）[注1]では「XガYヲZニスル」構文をとりあげ、その意味と構文の特徴に考察をくわえると同時に、それに対応する中国語の表現との対照を試みた。その結果、この構文は多くの場合、中国語の使役文と対応関係にあることが分かり、また日本語自身の構造と意味から見てもいわゆる他動表現とされているこの構文は実は使役の役をも果たしていることが観察された。例えば、

（1） 太郎ガ医者ニナツタ。

という文を使役で表わすと、「ナル」に「セル」をつけて、（2）のようになるはずであるが、実際にはこのような文は見られない。

（2） ?父ハ太郎ヲ医者ニナラセタ。[注2]

（2）のような意味を表わすには一般に（3）の表現が用いられるであろう。

（3） 父ハ太郎ヲ医者ニシタ。

つまり、ここでは、「ニスル」は「ニナラセル」のかわりに用いられ、使役の意味を担っているということである。こうした観察を踏まえた上で、筆者はこの構文を使役表現の一つであると見なすことは中国人に対する日本語教育において大変有益、かつ必要であると指摘した。しかし、時間と紙幅の都合で、その論文ではZが身分、職業、地位、

資格などをさし示す名詞の場合のみにとどまり、形容詞、形容動詞（以下形容詞で代表する）については言及しなかった。

本稿はZが形容詞の場合を取り扱うことにし、とりわけ、Zが形容詞の場合、「XガYヲZニスル」となるか、それとも「XガYヲZニサセル」となるか、その両者の異同について観察しようとするものである。

なお、考察にあたって、前回と同様、Xは有情物でも、非情物でもよいが、Yは有情物に限る。また「XガYヲバカニスル」といったような慣用的な表現が考察の対象としない。

## 2. 「ニナラセル」の形について

まず、Zが形容詞の場合「ナル」は「ナラセル」の形をとって現われるか否かについて見てみよう。

- (4) ?? a. 太郎ハ花子ヲ幸セニナラセル。  
b. 太郎ハ花子ヲ幸セニスル。
- (5) ?? a. 社員ハ社長ヲ有名無実ニナラセル。  
b. 社員ハ社長ヲ有名無実ニスル。
- (6) ?? a. 太郎ハネクラノ次郎ヲ明ルクナラセル。  
b. 太郎ハネクラノ次郎ヲ明ルクスル。

以上の例文をみれば、aはいずれも不適格文であるのに対し、bはすべて適格文であることが分かる。(4) - (6)のaのように「Zニナラセル」の形を取る文が不適格文であるのは上にあげたような形容詞だけにとどまらず、他の形容詞にも同じことが言えると思われる。つまり、「形容詞+ニナラセル」は「名詞+ニナラセル」と同様に形式としてはあるものの、実際には用いられない。ある意味では「名詞+ニナラセル」よりも許容度が低い。例えば、(7)のように、「名詞+ニナラセル」はある文脈あるいは修飾語句を伴えば成立する可能性もある。

(7) ?アノ会員制ゴルフクラブデハ有名人ヲタダダ会員ニナラセル。

(7) が成立可能であるとする母国語話者もいる。しかし、Zが形容詞の場合、文脈あるいは修飾語句があっても「形容詞ニナラセル」の形は成立不可能である。この名詞と形容詞の性質の違いは両者がそれぞれ、「～ニナツテモラウ」の構文〔注3〕をとって現われるかどうかという点においても観察される。例えば、

(8) a. 太郎ハ花子ニ助手ニナツテモラッタ。

\* b. 太郎ハ花子ニ幸せニナツテモラッタ。

(9) a. 花子ハ太郎ニ家庭教師ニナツテモラッタ。

\* b. 花子ハ太郎ニ有名ニナツテモラッタ。

(10) a. 有名人ニ会員ニナツテモラウ。

\* b. 社長ニ有名無実ニナツテモラウ。

(8) - (10) において、「名詞ニナツテモラウ」 a は適格文であるが、「形容詞ニナツテモラウ」 b は不適格文である。〔注4〕

このように、形容詞は「ニナラセル」、「ニナツテモラウ」のいずれとも共起せず、むしろ、「ニスル」と共起するのが普通のようなのである。以下、その実例をいくつか挙げておこう。

(11) 父は時々酒を飲んだ。その夜も一本の酒が父を上機嫌にしていた。

(黒)〔注5〕

(12) すこしの風でも荒々しく波立つ湖がこの日のような静かであることが人々を不安にし怖れさせた。(様)

(13) だから、社長夫人におさまることだけが、お前をしあわせにするただひとつの方法ではない… (日)

(14) 生みの母をもとめる心は、はやくから半蔵をゆううつにした。(夜)

### 3. 「XガYヲZニスル」構文の意味特徴

先にも触れたように、「XガYヲZニスル」構文は一般に他動構文とされている。例えば奥津（1967, 1978）、寺村（1982）。

奥津は「ニスル」は「ニナル」の他動であるとし、両者が自他の対応関係にあるとしている。一方、寺村（1982）はこれを他動としながらも、働きかけと変化の複合を表わす表現とみなしている。つまり、「ニスル」はXの働きかけとYの変化を同時に表わすということである。これはこの構文の意味に即した、正しいとらえかたであるが、しかし、見方をかえれば、使役もXの働きかけとYの動作、作用もしくは状態変化の複合であるといえよう。例えば、

(15) 太郎ハ花子ヲ来サセタ。

という文は、X（太郎）のことばによるはたらきかけとY（花子）の「来ル」という動作との複合であると考えられる。一方、同じ使役文であっても、次の(16)はX（太郎）のことばによらない働きかけとY（花子）の心理的状态変化との複合であると考えられる。

(16) 太郎ハ花子ヲ驚カセタ。

つまり、(15)と(16)の間にXの働きかけとYの動作・作用の複合のしかたの違いが見られ、前者の場合、Xの働きかけはことばを用いることが可能であり、Yも動作・行為の主体としてはたらく。これに対し、後者はXの働きかけはことばを用いないのが普通であり、Yも作用・状態変化の主体としてはたらく。XとYの複合のしかたからいえば、(16)は同じ使役文の(15)と異なり、むしろ次の(17)と似ている。

(17) 一本ノ酒ガ太郎ヲ上機嫌ニシタ。

(17)は(16)と同様に、XがYに対し、言語活動によらない働きかけをし、Yはその働きかけを受けて心理的な状態変化を生じるという意味を表わしている。したが

って、「XガYヲZニスル」は構文的には使役構文を表わす「サセル」という形をとっていないが、意味的には、(16)のような使役文と同じであるといえよう。

#### 4. 「ニスル」と「ニサセル」との違い

2. のところで「XガYヲZニスル」構文の実例をいくつかあげたが、しかし、次の例文に見られるように、「ニスル」のかわりに、「ニサセル」を用いることも可能なようである。

(18) …どうしたら旦那さまを夢中にさせるか、のみこみぬいていらっしやるんです。(女)

(19) 性質は無邪気で、快活で、一緒にいるとへんに人を愉快にさせる性質をもっていて、身体の随分いい人だそうだ。(友)

(20) あなたは何人の人を愉快にさせることができるか。(Big)

(21) この敗北感はすこしも松寿を卑屈にさせてはいなかった。(善)

ではどんな時に「ニスル」を用い、どんな時に「ニサセル」を用いるのであろうか。その両者の使い分けはなにによって決まるのであろうか。以下、この点について検討してみることにする。

##### 4. 1 「ニスル」、「ニサセル」のいずれかの形とも共起する形容詞

形容詞は人、もの、ことのいろいろな属性、状態、様子を表わすことができ、その意味内容が非常に多面にわたり、人間に関するだけでも、内面にある感情、気分、性格といった属性と外面の表情、態度、様子、ふるまいなどを表わすものがある。また、状態についても、その状態が持続的がそれとも一時的かの違いがある。形容詞の中に、いくつもの属性、状態を同時にあわせもつものもあれば、そうでないものもある。これから述べようとする、「ニスル」、「ニサセル」の両方と共起する形容詞はこのような多面的で、複雑な属性をあわせもつものであり、「ニスル」と共起すれば、Yの性質、状態の変化を表わし、「ニサセル」と共起すれば、Yの態度、ふるまい、様子の変化を表

わすことになる。次の例文を見られたい。

- (22) a. 太郎ガ花子ヲ明ルクサセタ。  
b. 太郎ガ花子ヲ明ルクシタ。  
(23) a. 太郎ヲ男ラシクサセルニハドウシタライイカ。  
b. 太郎ヲ男ラシクスルニハドウシタライイカ。

(22)において、aはX(太郎)がY(花子)に働きかけ、作用して(この働きかけはことばによる指示も可能である)その結果Yが一時的に明るいふるまい、様子もしくは態度を示したという意味にとれるが、bはXがYに働きかけ、作用して(一般にこの働きかけはことばによる指示が不可能である)その結果、Yの性格が明るくなったという意味になる。aにおいては、Yは動作の主体として意識され、意思の有無が問題となるが、これに対し、bではYはたんなる属性の変化の主体として意識され、その意思の有無が問題にならない。(23)についても(22)と同じことが観察される。すなわち(23)ではaはXがいかにかY(太郎)に男らしい行動をとらせるかという意味の表現であるのに対し、bはXがYの意思を無視して、Yが男らしい性格、性質を帯びるようにするという意味の表現である。次のような例文ではXはYの意思に働きかけ、Yが自ら動作、作用するようにしむけるものであるため、「ニサセル」を用い、「ニスル」は用いられないようである。

- (24) a. 太郎ハイカニ花子ヲ大胆ニサセルカイロイロ考エタ。  
?? b. 太郎ハイカニ花子ヲ大胆ニスルカイロイロ考エタ。  
(25) a. 太郎ハイカニ花子ヲ従順ニサセルカイロイロ考エタ。  
?? b. 太郎ハイカニ花子ヲ従順ニスルカイロイロ考エタ。

インフォーマントによれば、(24)、(25)において、aは適格文であるが、bは不適格文であるという。一方同じ「大胆」、「従順」を用いて、(26)、(27)では「ニスル」との共起も許容されるという。

- (26) クラヤミガカエツテ花子ヲ大胆ニシタ。

(27) 夫ノ愛情ガ花子ヲ従順ニシタ。

(26) では X の働きかけを受けた Y (花子) は自らの意思で、大胆な行動をとったという意味よりも、むしろ、内面にある属性、状態が代わったというべきであろう。花子はたんなる属性変化の主体であるにすぎない。同様に、(27) も Y (花子) は性格的に従順になったのであり、意図的に従順になろうとしてなったのではない。一体、「Y ガ Z ニナル」という変化を表わす構文において、変化の主体である Y が自らの意思で、意図的に変化する場合もあれば、非意図的で、結果的に変化する場合もある。前者の場合、その変化する主体を動作の主体として見なすことができるが、後者の場合、その変化の主体を状態変化の主体としてしか見なすことができない。したがって、Y が動作の主体としてはたらく場合にはその意思の有無が問題にされ、「ニサセル」と共起するが、Y が作用、状態の変化の主体としてはたらく場合には意思の有無が問題にならず「ニスル」と共起するのが普通である。大方の形容詞はこの両方の形式と共起するが、しかし、一方としか共起しないものもある。4. 2 で述べる形容詞は「ニスル」としか共起しない。

#### 4. 2 「ニスル」としか共起しない形容詞

4. 1 で見た形容詞は、「ニスル」と結びつくか「ニサセル」と結びつくかによって意味の違いが生じるものであるが、これから述べようとする形容詞はいずれも「ニスル」のみと結合し、「ニサセル」とは結合しないものである。

(28) a. 太郎ハ花子ヲ幸セニシタ。

\* b. 太郎ハ花子ヲ幸セニサセタ。

(29) a. 社員ハ社長ヲ有名無実ニシタ。

\* b. 社員ハ社長ヲ有名無実ニサセタ。

(30) a. 父ハ太郎ヲ健康ニシタ。

\* b. 父ハ太郎ヲ健康ニサセタ。

(28) - (30) において、a はいずれも適格文であるが、b はすべて不適格文である。(28) - (30) の a は X の言語活動以外の働きかけを受けた Y がある状態か

ら他の状態へと変化する意味を表わす文であるが、Yは動作の主体として、その変化を  
 実行したものではない。一方、(28) - (30)のbが成立しない理由は何であろう  
 か。先に示したように、「ニサセル」は一般にXがYの意思に働きかけ、その働きかけ  
 を受けたYが動作主として自ら動作、行為を実行する場合に用いられるが、しかし(2  
 8) - (30)の形容詞はある状態、性質を示すが、動作、ふるまい、態度などは表わ  
 すことができない。また「幸ニナル」とか「有名無実ニナル」などはXの働きかけを受  
 けて、Y自身の意思でコントロールできるものではない。このことはこれらの形容詞が  
 「大胆ニ」などと違って、構文的には連用修飾語にはならない、もしくはなりにくい  
 という特徴をもっていることから分かる。例えば、「有名無実ダ」などは、「有名無実ナ  
 ニ動詞述語」のように、一般の動詞を修飾することができず、もっぱら、「有名無実ナ  
 社長」のように、連体修飾の機能しかもたない。また、「健康ダ」「幸セダ」は「健康  
 ニ暮ラス」とか「幸セニ暮ラス」などのように連用修飾語になることは可能であるが、  
 「暮ラス」とか「生活スル」といったようなもの以外の動詞を修飾することができな  
 いと思われる。このように、「ニスル」と共起する形容詞はYがXの働きかけで、ある状  
 態、性質を帯びるようになったという意味を表わすという点において、次に述べる「ニ  
 サセル」としか共起しない形容詞と性質を異にしている。

#### 4.3 「ニサセル」としか共起しない形容詞

次の例文は「ニサセル」を用いるaは適格文であるが、「ニスル」を用いるbは不適  
 格文である。

- (31) a. 先生ハ学生ヲ静カニサセタ。  
 ?? b. 先生ハ学生ヲ静カニシタ。  
 (32) a. ナニガ太郎ヲ本気ニサセタノカ。  
 ?? b. ナニガ太郎ヲ本気ニシタノカ。

(31) aはX(先生)がY(学生)に静かにするようにことばで指示し、あるいは  
 ことば以外の働きかけで学生が静かになるようにしむけ、その結果、学生が静かにな  
 ったという意味を表わしているが、しかし、学生の内面的な性格そのものは代わって  
 ない。同じように、(32) aも本気になったのはY(太郎)の態度、あるいは表面的な

様子であり、太郎の本質的な性格、性質などは無関係なのである。つまり、(31)、(32)のaはXの働きかけの結果、Yがある状態、性質を帯びようになったのではなく、ある態度、ふるまいを示したという意味の表現である。この「ニサセル」としか共起しない形容詞は以上あげた二つのほかにさらに「オトナシイ」「シンケンダ」「熱心ダ」などがある。このグループの形容詞は先の「健康ダ」「有名無実ダ」などと違って、いずれも連用修飾語になることが可能である。例えば、「オトナシク食ベル」「シンケンニヤル」「熱心ニ勉強スル」など、多くの述語動詞を連用修飾することができる。さらに、次の点においても前述の「ニスル」としか共起しない形容詞と異なる。例えば、「健康ダ」の場合、(33)ではbがaの意味上の補文と考えられる。

- (33) a. XガYヲ健康ニシタ。  
b. Yガ健康ニナツタ。

一方、「ニサセル」としか共起しない形容詞はaの意味上の補文はbではなくcである。

- (34) a. XガYヲオトナシクサセタ。  
b. Yガオトナシクナツタ。  
c. Yガオトナシクシタ。

つまり、「健康ニスル」などは他人への働きかけを表わすことができるが、「静力ニスル」では自分の動作、行為しか表わさず、他人への働きかけを表わすためには、「静力ニサセル」を用いなければならない。この両者の補文の異同も一方が「ニスル」のみと共起し、もう一方が「ニサセル」のみと共起することと関わっているのではないだろうか。

これまで観察してきたことは、次のようにまとめることができる。

形容詞の中には「ニスル」としか共起しないものもあれば、「ニサセル」としか共起しないものもある。また、両方の形式と同時に共起する形容詞もある。

「ニスル」としか共起しない形容詞は意味的には属性、状態、評価しか表わさないが、構文的には一般に連用修飾語になりにくいようである。

「ニサセル」としか共起しない形容詞は意味的には属性、状態ばかりでなく、外面的な態度、ふるまいなども表わす。構文的には、連体修飾語にも、連用修飾語にもなる。ただし、「ニスル」の形をとると、他人への働きかけの意味がなくなり、自らの動作、行為を表わすことになる。

一方、「ニスル」と「ニサセル」の両方の形式と共起することが可能な形容詞は「ニスル」と結びつく場合はXの働きかけを受けたYが作用、状態変化の主体として内面にある性質、性格、状態変化を生じ、これらの変化はY自身の意思によって行なわれるものではない。これに対し、「ニサセル」と結びつく場合はXの働きかけ（言語活動による働きかけも可能である）を受けたYが動作、行為の主体としてある動作、作用、もしくは属性、状態変化を示し、これらの属性、状態変化は一般に恒常的もしくは、本質的なものでなく、一時的、あるいは表面的なのが普通である。

このように「ニスル」と「ニサセル」の間に上のような異同が見られるが、両者の間に明確に境界線を引くことは難しい。例えば、

- (35) a. 一本ノ酒ガ父ヲ上機嫌ニシタ。  
b. 一本ノ酒ガ父ヲ上機嫌ニサセタ。

aとbの間には必ずしも以上のような違いが明確に出ていない。形容詞の意味から、二文とも一時的な様子を示しているということになるかもしれない。

## 5. 「ニスル」と「ニサセル」のいずれとも共起しない形容詞

### 5.1 感情・感覚形容詞

形容詞の中に、これまで見てきた客観的な性質、属性、状態などを表わすもののほかに、人間の主観的な感情、感覚を表わすものもある。例えば、「サビシイ」「カナシイ」「クルシイ」「タノシイ」「イタイ」「ネムイ」など。しばしば指摘されるように、これらの形容詞は前述の形容詞と異なって、話し手自身の主観的な感情、感覚を直接的に表わしているため、主語が話者自身でなければ、用いられない。同じことは「ニスル」、「ニサセル」構文にもあてはまる。

- (36) ?? a. 友人ノ死ガ太郎ヲ悲シクシタ。  
 ?? b. 友人ノ死ガ太郎ヲ悲シクサセタ。  
 c. 友人ノ死ガ太郎ヲ悲シマセタ。
- (37) ?? a. 一時間ノシヨウガスツカリミンナヲ楽シクシタ。  
 ?? b. 一時間ノシヨウガスツカリミンナヲ楽シクサセタ。  
 c. 一時間ノシヨウガスツカリミンナヲ楽シマセタ。

(36)、(37)のaとbはいずれも不自然な文であり、これらをそれぞれcのように直してはじめて自然な表現となる。したがって、感情、感覚形容詞の使役文の場合には「XガYヲZニスル」「XガYヲZニサセル」構文を用いるかわりに、意味上対応する動詞を用いるのが普通である。

## 5. 2 こと、ものなどの属性、状態を表わす形容詞

形容詞の中には人間に関する属性、性質を表わすもののほかに、こと、ものに関する属性、性質などを表わすものもある。「オイシイ」「アカイ」「ヒロイ」など。これらの形容詞は一般に人そのものを主語にとらないから、Yが有情物の場合、当然「ニスル」、「ニサセル」構文には用いられない。例えば、

- (38) \*何が彼ヲ赤クシタノカ。  
 \*何が彼ヲ赤クサセタノカ。
- (39) \*何が彼ヲ広クシタノカ。  
 \*何が彼ヲ広クサセタノカ。

## 6. おわりに

これまで、「ニスル」についての研究はあったが、「ニスル」と「ニサセル」の違いに関する研究はあまり行なわれていなかったと思われる。

本稿は上のような形にまとめたものの、まだ不完全なものであり、修正すべき部分は

かなり残されているだろう。先学諸氏の御指導、御教示をいただければ幸いである。

付記…本稿の例文の一部の成否判定のインフォーマントは主として、本研究室の院生であるが、特にアンケートをお願いしたのは渡邊文生、寺尾康、清水由利子、乾秀行の諸氏である。ここに感謝の意を表したい。また原稿に目を通され、有益な御助言をくださった草薙裕先生にもお礼申し上げます。

【注】

- 1) 「『XガYヲZニスル』構文について — 中国語との対照を通じて —」  
『日本語と中国語の対照研究』第11号、1986 日本語と中国語対照研究会編
- 2) この種の文は文法的にはあまり問題がないが、許容度からいえば、「父ハ太郎ヲ医者ニシタ」よりはるかに低い。文脈があれば、成立する可能性もある。詳しくは、楊（1986）参照。
- 3) 「ニナツテモラウ」も使役表現の一つと見なしている。詳しくは筆者の「使役表現について — 中国語との対照を通じて —」を参照されたい。
- 4) 同じ形容詞でも「明ルイ」を用いて、次のようにいうことができるという指摘もある。「親ガ来ル時ダケ、明ルクナツテモラッタ。」しかし、これは、Yの変化、作用はYの意味で演技としてわざと行なった場合にのみ許容される。また「テモラウ」が次のような場合にも許容されるようである。「ミナサンニ幸セニナツテモラウタメニ…」 「ミナサンニ幸セニナツテモライタイデスネ。」
- 5) 例文の出典の略記は、以下を表わしている。
  - （黒） 『黒い御飯』 永井龍男
  - （桜） 『桜蘭』 井上靖
  - （日） 『日々の背信』 丹羽文雄（『日本語文法・連語論』資料篇より。言語学研究会編、むぎ書房刊）
  - （夜） 『夜あけ前』 島崎藤村（同上）

- (女) 『女坂』 円地文子(同上)  
 (Big) 『Big Tomorrow』 雑誌  
 (著) 『菩提樹』 丹羽文雄(資料篇より。)

【参考文献】

- 池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学』大修館書店  
 井上和子(1976)『変形文法と日本語』大修館書店  
 奥津敬一郎(1976)「自動化・他動化および両極化転形 -自・他動詞の対応-」  
 『国語学』70号  
 \_\_\_\_\_(1978)『「ボクハウナギダ」文の文法 -ダとノー』くろしお出版  
 柴谷方良(1982)「日本語と英語」森岡健二他編『講座日本語学10 外国語  
 との対照I』明治書院  
 スワン彰子(1979)「<となる>と<になる>について」ILT News 66  
 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版  
 時枝誠記(1950)『日本文法 口語篇』岩波書店  
 西尾寅弥(1947)『形容詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所報告44  
 秀英出版  
 藤井正(1971)「日本語の使役態」『山口大学研究論叢』20  
 三上章(1953)『現代語法序説』刀江書院(復刊 くろしお出版 1972)  
 森田良行(1982)「日本語動詞の”意味”について」『日本語教育』47号  
 日本語教育学会  
 \_\_\_\_\_(1986)「動詞の語彙面と文法面」『国文学 解釈と鑑賞』至文堂  
 楊凱栄(1985)「『使役表現』について -中国語との対照を通じて-」『日本  
 語学』4月号  
 \_\_\_\_\_(1986)「『XガYヲZニスル』構文 -中国語との対照を通じて-」  
 『日本語と中国語の対照研究』第11号 日本語と中国語対照研究会編

A contrastive analysis of the adjectives which occur in the Z position of the "X ga Y o Z ni suru" and "X ga Y o Z ni saseru" constructions.

Yang Kai Rong

This paper presents the differences in the adjectives which occur in the Z position of the "X ga Y o Z ni suru" and "X ga Y o Z ni saseru" constructions, where Y has the feature [+ human]. A comparison of these two constructions showed that the co-occurrence of the four types of adjectives: 1) adjectives such as akarui, which occur with both of these constructions, 2) adjectives such as yuumei, which occur only with the "ni suru" construction, 3) adjectives such as honki, which occur only with the "ni saseru" construction, 4) adjectives such as kanashii and akai, which do not occur with either of these constructions.